広報
市民リポーターだより
No. 6

開学から4年
秋田桂城短期大学を訪ねて

リポーター
近藤 正彦さん（御成町4丁目）

日差しの和らかな十月下旬、私は秋田桂城短期大学を訪れました。先に開学した秋田職業能力開発短期大学校に次いで、市内で二番目の専門系短大。市民の大きな期待をにない平成八年四月開学。《地域に根ざし、地域社会に貢献できる人材の育成》を教育目標に掲げ、兄弟校である秋田経済法科大学とは学問的な交流、提携をしながらも独立した運営を行っている桂城短大の、開学四年目の姿を知りたくリポートしてみました。

取材する近藤リポーター

円形の建物を中心に左右に伸びた重量感のある学舎。この中に学生三百五十余名と教職員百余名で、さぞ騒々しくにぎやかであろうと考えていましたが、騒音ひとつない静けさ。まずは学長室で、宮城一男学長にお会いしました。宮城学長の専門は地質学で、大館には花岡、釈迦内の鉱山隆盛のころに何度か足を運ばれたこともあり、秋田市に育ち弘前市（弘前大学）を職場としていた関係上、新しい地に赴任したという感はないとのこと。とても気さくなかたで、相手に構えさせるようなこともなく、色々お話をお聞きすることができました。

開学の効果

昔から大学や専門学校が多くあった秋田市や弘前市とは違い、大館は若者向けの体を動かす場、憩う場などが少なく、若者にとっては魅力のある街であったとは思えません。けれど、若者が増えたことで街が明るくなり、アパートや若者向けの店も増えてきました。街の活性化に向け、市民自ら考え動く気運も出来てきました。桂城短大の開学は、街づくりのための大きな自信ときっかけになったと思います。

また、短大の教員が、その専門性や学識経験などの面から、行政などの委員会や会議の委員に委嘱されたり招かれることが多く、年間延べ二百回以上の会議に関わっているとのこと。時には苦言や批判と受け取られる場合もあるようですが、今後も、よりよい地域づくりのために短大の専門性を大いに生かしてほしいと思います。

地域への開放については、市と共催で生涯学習推進のために実施している大学公開講座も今年で五回目。平日の月曜日から金曜日の連続五日間の受講者も百名を超す盛況ぶりで、これは他地域にはない熱心さであるとのこと。その他にも耳学よりも実習をと、大学の充実した施設とノウハウを生かした看護・介護・コンピューターの講座などにも数多く開放され、図書館の専門的な図書、図版、ビデオなども、医師や看護婦（士）、看護学院生、福祉ボランティア関係者に多数利用されているとのこと。宮城学長の『体育館や円形の大教室などはもちろん、図書館や小単位の会議にも大いに利用してもらいたい』とのことばに、地域に根ざした大学を目指す桂城短大の意気込みを強く感じました。